

---

# sun-dawn blue

柳 すすたけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

sun-dawn blue

### 【Nコード】

N2370T

### 【作者名】

柳 すすたけ

### 【あらすじ】

ブライダルフォトショップ『colorful drops』の数少ない男性従業員、神崎トオルは去年入ってきた桜庭リサに一目惚れをした。何かから逃げるように仕事に打ち込む彼女に、トオルが映る日が来るのだろうか。

Colorful Drops シリーズ第2弾。

## アイオライト

ブライダルフォトショップ『colorful drops』は、従業員の8割が女性だ。

結婚式は女性の人生で一番と言っても過言で無い一大イベント。そのイベントのその瞬間を残す花嫁が、少しでもリラックスして些細なことでも相談できるようにとオーナーが配慮した結果だ。そして、そこで働く数少ない男性が慌しく走り回っていた。

「トオルくん悪いんだけど、倉庫から印画紙二ケースよろしく」

「あ、倉庫行くならついでに台紙もお願ひします」

「神崎くん、それ終わったら会場への搬入機材準備が待ってるから」  
「了解ッス」

神崎トオルは親のコネでここにアルバイトとして入った。神崎の親は有名なプロカメラマンで、その対象はグラビアアイドルだった。高校生の時分までは多めに反抗していた。悪友とつるみ繁華街で適当に女を漁り、一晩限りの関係を楽しんだ。

もちろん学校になど行くはずもなく、留年は当たり前だった。三回目の一年生になる前に夜遊びが学校に知られて、自主退学になった。

「うええ、今日の機材半端な量じゃないなあ」

リストアップされた機材を頭に浮かべながら、トオルはげんなりした。しかし足は止まらず、台車を押して倉庫に向かう。

誇りっぽい倉庫を開錠しようとして鍵を挿すとすでに開いていた。怪訝に思いドアを開けると、誰かが一番下の段に身体を突っ込み探し物をしていた。

ユニフォームの後ろポケットから覗くアイオライトのストラップで誰だかすぐにわかった。去年入った桜庭リサだ。

「なんつーカッコしてんスカ」

「っ！あだっ！」

あからさまに驚いたりリサは、跳ね上がった瞬間に頭を打ちつけてその場にうずくまる。

「桜庭サンがそんなことしてるなんて珍しいツスね」

「今週いっぱい表に出るなって、軟禁命令が出たんだよ。花嫁に不幸がうつるってさ。あたしゃ伝染病かっつの」

「ああ、ナルホド」

「ちよつと、何納得してんの？」

「だって桜庭さん、三日前は魂が散歩に出かけてる感じだったんスよ？」

「そんなに酷かった？」

「ブサイク三割増でした」

「ムカつく」

自分の顔をぎゅっと掴み変顔を試みせるトオルにリサはローキックを入れる。

「いって！！何すんスカ」

「さっき頭ぶつけたからそのお返し」

あつかんべーをして倉庫を出て行く姿は、トオルより2歳年上とは思えない幼い行動だ。

クスクス笑いながらも、トオルは諸々の欲求に耐えた自分を褒め称えたい気分だった。

「まったく、人の気も知らないで暢気ですよ、桜庭サンは」

散々女でいい思いをしてきた自分が、初めて手を出すのに戸惑った相手。桜庭リサは神埼トオルの初恋相手だった。

## 瑠璃色のタンブラー

「アカネさん、頼まれたものバツクに置いてありますから」  
「神崎くんありがとう、搬入ずれ込むから先に休憩入って」  
「了解ッス」

印画紙と台紙をバツクヤードに運び、事務所に声をかけるとチーフのアカネから返事があつた。

「あ、そうだ」

書類を捲る手を止めずに、アカネは爆弾発言を投下した。

「リサちゃんも休憩に行かせたからいつものカフェにいると思うよ、ガンバレ、青少年」

「っ!!!!」

「ばれてないとも思った？ホントわかりやすいなあ、神崎くんは」  
「まさか、全員にばれてるとか？」

「気づいてるのは私とダンナとカズコ嬢ぐらいじゃないかな」

「え、ノブユキさんにもばれてんスか？」

「ノブユキ曰く、テツジさんに似てるらしいよ」

「…そうですか」

苦い顔のトオルを見て、アカネはふと尋ねる。

「テツジさんのこと、許せない？」

「そのせいで俺たち兄弟がどうなったか、知ってますよね？」

「そうね、配慮のない一言だったわ、ごめんなさい」

「アカネさんたちが両親なら良かった」

「トオルくん？」

「飯、行つてきます」

トオルはアカネの言葉に答えず踵を返すとロッカールームから青い蝶のモチーフが入った財布を取り、リサがいるであろうカフェへと向かった。

店から徒歩二分にあるカフェは、『colorful drops』の従業員お気に入りです。店ぐるみでお世話になっている。

木の温もりを感じさせる落ち着いた内装だが、緑地に面した広いウッドウから入る自然光で日中店内が薄暗いことは無い。

ブライダルパーティーで使うことも可能で、パーティー時の写真撮影で業務提携もしている。

「お疲れ様ッス」

「おつかれ」

入って一番奥の二人掛けテーブルにリサがいる。彼女の指定席だ。

「今日は早めの休憩なんだね」

「搬入がずれ込んでるんで休憩が先」

「そうなんだ」

「ってかこの後の長丁場を思うとテンション下がる」

「ガンバレ」

「愛が籠もっていないツス」

クスクス笑いながら、リサがメニューをトオルに渡す。

「今日の日替わりランチはポテトとハムのホットサンドだって」

「パスタは？」

「アンチヨビと枝豆のペペロンチーノ」

「桜庭さんどっちにした？」

「あたしはホットサンドにした」

「じゃ俺もそれにする」

カウンターにいるウェイターに声をかけ注文すると、リサに向き直る。「で？」と問いながらグツと顔を近づけた。

「四日前に何があった？」

「その話題、昨日もカズコさんに聴取されたんですけど」

「俺は聞いてないよ」

「幸せなランチタイムを返せ」

「ここ俺が持つからさ」

「そんな安いのか？あたしの失恋は」

「だったら今夜はどう？俺の奢り」

呆れたように息を吐き出すと、渋々といった様子でリサは承諾する。

「いいよ」

「じゃ、そついうことで」

上機嫌で水を一気に煽ると、ウェイターにむかって瑠璃色のタンブラーを見せる。すぐに水差しを持ってウェイターがやってきた。

その様子をなんともなしに眺めながら、ふと気づいたことをリサが問う。

「そういえば最近敬語はずれてきたね」

「え？そうスか？」

「うん、さつきはガツツリはずれてた」

「桜庭さんと仲良くしたいからさ、だめ？」

「だめじゃないけど…」

「ああ、大丈夫、仕事の時はちゃんと敬語使うから」

渋るリサに拒否させまいと、トオルは畳み掛けるように言う。

「ってか仕事の時に敬語はずしたらチーフに怒られるんじゃない？」

「そ、だからタメ口はプライベートの時だけ」

「しょうがないなあ」

苦笑しながら水を一口含み、タンブラーをテーブルに置く。すると、顔を出した太陽を反射したタンブラーの瑠璃色がリサの心臓の上でゆらゆら揺れた。

だんだんと色づく様をじっと見ていたトオルを怪訝に思い、リサは眉をひそめ胸元を見る。

「何か付いてる？」

「動かないで」

「何？」

「桜庭さんの胸のところにタンブラーの色が反射してる」

そう言いながらトオルは自分の携帯電話を取り出すとカメラ機能を呼び出して写真を撮った。撮られることに慣れていないリサは突然のことに眉をさげてすっかり困り顔だ。

「ホラ、可愛く撮れた」

「全然可愛くないじゃん!!」

みせられた写真を見て抗議するリサに真剣な顔でトオルは言う。

「リサは可愛いよ」

真っ赤になったリサの胸の上では瑠璃色がゆらゆら揺れている。それはまるでリサの心を映したようだった。

## ブルージルコン

真つ赤になってうつむいたままのリサに新たな一面を発見して、トオルはニヤニヤと笑みが零れる。去年、出会った時から自分の女性像をこれでもかと破壊してきたリサの初めての女性らしい仕草。そのギャップに、ふと、出会った日のことを思い返した。

「神崎くん、ちょっといい？」

「はい？」

ジメジメした曇りの日が続く五月下旬、今年は早めの入梅だろうかとおもいながらトオルはロッカールームに向かっていた。今日は夜遅くまでの予約が入っているので午後からの勤務だ。

チーフに呼び止められて、神崎はロッカールームに入ろうとした足を止めた。事務所からチーフが手招きをしている。

「なんだろう？」と首を傾げつつ事務所に入ると、見知らぬ女性が立っていた。目が合うと軽く会釈される。

「今日は神崎くん午後からだから、今のうちに紹介しておくわね」「はあ」

黒いパンツスーツを纏った女性は、おそらく平均的な女性より背が大分高いだろう。襟足の長いショートカットを整髪料でさりげなく

整えた風貌は、宝塚の男役をイメージする。薄化粧の下に、隠しきれない疲労が見えている。その表情から目を逸らすことができなかった。

「はじめまして、桜庭リサです」

「神崎トオルツス」

「こら、語尾と会釈の仕方に気をつけなさい」

その見た目に反して豪快に笑うリサにトオルは若者らしい首を動かすだけの挨拶をすると、チーフに窘められた。

大きく口をあけて一頻り笑うと、リサはアカネに言った。

「私なら平気ですよ」

「ダメよ、彼、今更生中だからきちんと躡けてるの」

「…前科持ち？」

「失礼だなあアンタ」

「神崎くん、似たようなものでしょうが、それと、彼女あなたより年上よ」

左耳を引っ張られ、トオルは口を尖らせ抗議する。ブルージルコンのピアスが引っかかり、尋常ではない傷みが走る。

「アカネさん、ピアス引っ張らないでくださいよー!!」

「ならきちんと挨拶しなさい」

「…神崎トオルです、よろしくお願いします」

「よろしい」

アカネは満足げに頷き、リサはフフと柔らかな笑みを浮かべる。ショートカットの髪が揺れて、どこか儂げに見えた。

その姿に、魅入られた。

バクバクする心臓と、自分の中に現れた得体の知れない独占欲にトオルは驚いた。

「顔合わせも済んだことだし、神崎くんは着替えてきてね」

アカネの声が聞こえないのか、トオルは身動き一つせずにリサを見つめる。やや釣りあがった猫目で見つめる図は傍からみれば威嚇しているようだ。

「あの？」

「聞いている？トオルくん」

あまりにもリサを凝視するトオルに、思わずアカネは名前で呼びかける。ハツとしたトオルはすぐに「すみません」と謝り、ロッカールームへ入っていった。

「桜庭さんは今日一日彼について瀬戸さんのサポート、よろしくね」

「瀬戸さんのサポートですね？」

「そう、瀬戸ケンシヨウ、うちのカメラマンたちの責任者だから」

「わかりました」

## カラーフィルター

ユニフォームに着替えたトオルは、リサを連れてスタジオに入る。十六畳ほどの小さなスペースだ。入ってすぐ右に照明機材とカメラがあり、その奥にテーブルセットとメイク道具が詰め込まれたワゴンがある。左側は赤いマットが敷かれ背景スクリーンがある。テーブルセットの周りに四人のスタッフがいた。

「おはようございます」

「おう神崎、おはよう」

「おそようございます、神崎くん」

「おはよう」

「おはようございます」

それぞれと個性的な挨拶を交わすと、トオルはリサに説明する。

「髪の毛束ねてるおっさんが瀬戸ケンシヨウさん」

「朝のミーティングでも会ったがよろしくな」

「で、その右の明るい茶色のポブカットが梶間ユキコさん」

「ユキって呼んでねー」

「この二人がカメラマン・・・です」

うっかり敬語を忘れそうになると、すかさずケンシヨウが睨む。逞しい身体と切れ長で鋭い眼光の迫力に負け、トオルは不自然に語尾をつけた。

「おいおい、自分より後輩だからってなめた口の利き方するんじゃない

ないぞ」

「わかってますよ!!」

「私たちは紹介してくれないの?」

メイク道具のワゴンを整理しながら、髪の毛をトップでまとめた女性が言う。細い枝のような身体にヒップバックをぶら下げ、さまざまにブラシを挿している。

「ああ、すみません、彼女が小野田カズサさん」

「仕事熱心で他人にも自分にも厳しいよね、カズサって」

「ユキがちゃんぼらんなだけでしょう」

「で、そっちのヘルメット頭が営業の上野カズコさん」

「ちょっと人の髪型を差してそれはひどいでしょう」

営業だというカズコは、両手を腰にあててトオルも見上げ言い返す。小柄でもメリハリのある体つきとぼってりした唇と鼻がかわいらしく見え、そこに甘いドーリーメイクを軽くしている。

ほんわかした天然女性をイメージさせた。が、どうやら性格はしっかりしているようだ。

「で、さっそくなんだけどミーティングね」

カズコが持っていたバインダーを見せながら説明する。

「次のお客様は14時に来店、そこからヘアメイクと着替えがあります」

「確かフルセットでいいのよね?」

「はい、新婦様は髪型もこちらにおまかせすると言っています」

「上野、衣装の色は?」

「新婦はブルーグラデーション、裾に向かって濃くなっていくタイ

ブ、新郎はミッドナイトブルー」

「つてことはバックスクリーンは明るいクリームだな、照明にも3  
8番35番用意しておけ」

「はい」

「オプシヨンの追加はなく、新郎新婦お二人のみの撮影、全身とバ  
ストアップをワンカットずつお願いします」

「了解」

「こちらからは以上です」

バインダーを小脇に抱えたカズコと、ワゴンを整理していたカズサ  
がスタジオから出て行く。

「よし、じゃ新人に働いてもらうか」

ケンシヨウは壁際のラックからカラーボックスを持ってくるとリサ  
に言った。

「これがカラーフィルターだ、芝居やライブなんかで使うやつだ」

「始めてみました」

「だろうな、ふつう写真撮影じゃ使わない」

「なんで今回は使うんですか？」

「ブルーだからさ」

こともなげに答えたケンシヨウに、リサは困惑の色を浮かべる。ユ  
キコがリサの肩に手を置いて苦笑する。

「補色だよ、新郎新婦の顔色が衣装の色が反射して顔色悪く見えな  
いようにって」

「細かい配慮なんですな」

「人生でそう何度も撮るようなモンでもないしな、だったら、最高

に綺麗な写真にしてやりたいだろ？」  
「データ上で修正じゃないんですね」

関心したようにリサが言うと、ユキコは右手の人差し指をピツと立てて物知り顔で言う。

「昔からこの方法で撮影してるみたい、なんせこのやり方始めたのオーナーなのよ」

「え？オーナーが始めたんですか？」

「当時肌の色が透き通るくらい白い女性がいてな、顔色が照明で飛んで病気みたいにみえたんだよ」

ケンシヨウがボックスの中から蛇腹に折りたたまれた紙を出し、それをリサに渡す。

「で、その女性のいつもの透き通るような白さを撮りたいってんで生み出したんだよ」

「素敵な話ですね」

「ちなみにその女性って、アカネさんだぞ」

「そうなんですか？」

「そうなんだ、ってか無駄話してないで準備するぞ、これ色見本、この中に38番と35番もあるから見比べながら探してくれ」

「わかりました」

「梶間は小野田について新婦の心をあらかじめ解しておけ、神崎はスクリーンのセッティング以上解散」

的確に出された指示に三人はそれぞれ頷くと、自分の仕事に取り掛かった。

## にらめっこ

時間通りにやってきた新郎新婦は、ミーティングでいていた通りの衣装に身を包みスタジオに入ってきた。

その先頭に立ち案内しているのはカズコで、後ろにはカズサが付いて新婦のヴェールや裾を捌いている。ユキコはカズサの隣に並んでいたが、スタジオに入るなりシヨウスケに駆け寄り耳打ちする。

「新婦さん、さとう緊張してます」

「お前が落とせないなんて珍しいな、梶間」

「ワケあり新婦さんで、素直に喜べない部分があるみたいで」

「へえ」

ケンシヨウが露出計で光の強度を測定しながらちらちらと新婦を見る。

胸元の開いたローブデコルテから、やや色は濃い日本人特有の肌色が覗いている。顔に目を向けると、なるほど、確かに笑顔を浮かべてはいるが緊張しているのだろう。どこかぎこちない。

「桜庭」

「はい」

「カラーフィルターは今回はいらなさそうだが、万が一を考えて35番を一台スタンバイさせておけ」

「はい」

「それが終わったらお前は見学、神崎、レフ板、お前に任せる」

「はい」

「梶間、新郎新婦の準備がよければこちらに案内して」

「はい、それではお二人とも、ゆっくりと赤い絨毯の上に進んでく

「ださい」

指示を受けたユキコが新郎新婦に近付き、裾に気をつけながら新婦に手を貸しカメラの前へ誘導する。カズサもヴェールと裾を捌いて誘導を手伝う。

「はい、そちらのバツ印が基本の位置です、ポーズはどうしますか？」

カメラ前のいい位置につけられたバツ印を挟んで新郎新婦を立たせた。後ろでは手早くカズサがヴェールと裾を綺麗に見せるために手直ししている。

新郎は新婦の腰に手を添え、「どうする？」と尋ねた。

「あの、どうしたらいいのかわからないのでそちらにお任せします」「わかりました」

遠慮がちに小さな声で答える新婦に頷くと、ユキコは営業スマイルで返した。そしてさらに言う。

「新婦さん緊張してきちゃったみたいですね、一度深呼吸してみてくださいよ、サヤカ、ほら深呼吸」

「う、うん」

にっこり微笑む新郎と戸惑いながらそれに応じる新婦。どうやら新婦は相当緊張しているらしい。すると突然、ケンシヨウの後ろで見学していたリサが新郎新婦に近寄り新婦に声をかける。

「この度はご結婚おめでとございます」  
「ありがとうございます」

唐突に声をかけられ、驚きに目を丸くしながら新婦が答える。その反応をきっかけにリサは新婦に話しかける。

「突然声をかけたので驚いていらっしやいますよね、申し訳ございません」

「い、いえ」

「私は本日よりこちらで撮影を担当します桜庭と申します」

丁寧に頭を下げ、リサは新婦の様子を窺う。驚きが先に立っているので警戒するのを忘れているようだ。

リラックスさせるチャンスは今しかない。リサはそう判断した。

「サヤカさん、私とにらめっこしましょう」

穏やかに笑みを浮かべやや低い声音でそう告げる。まるで男性が女性を口説いているような雰囲気を感じながらでた言葉は、現状に相応しくない言葉だった。

カズコとカズサ、ユキコが目にも余る行動に凍りつき、ケンシヨウは目を細めて口の端を持ち上げ面白そうにやり取りをみている。腕組みをしてソフトボックスの前から動こうとしない。

トオルはこの突拍子もない行動をとる人物はいったい何をするともしりなんだ、と、目を皿のように開いて固まる。

「旦那さまといきなりにらめっこは恥ずかしいと思いますので、最初は私としましょう」

「ね？」と首を傾げて新婦の両肩にやさしく手を乗せる。大丈夫、

私を信じて、そう思いを込めて。

新婦の表情が驚きから怯えに変わっていたが、乗せられた両腕と真っ直ぐ射抜くように見つめてくる黒い瞳に何かを感じ、ゆっくりと頷く。

「旦那さまも他人事だと思って傍観しないでくださいね、最後はお二人にしてもらいますから」

悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべてくると新郎に向き直る。新郎は「はぁ」とか「あぁ」とかよく聞き取れない生返事をする。

その返事を聞いているのかいないのか、リサは数歩新郎新婦から離れた。

リサが立ち止まった場所でケンシヨウはリサの狙いに気づき、新郎新婦の意識がリサに集中していることを確認しながらカズサに声をかける。

「このまま撮影に入るから、カメラに写らない範囲に出る」

カズサがその指示でハッと新婦を見る。新婦の意識はリサに集中していて、自分の置かれた状況が頭の中で薄れているようだ。

裾が綺麗に見えているか、ヴェールが新婦の顔にかかっていないか、メイクの崩れがないかをすばやくチェックしカーペットの外へ出る。それに気づいたユキコがカメラをケンシヨウに渡し、タオルがレフ板を持って移動し、新婦の意識を逸らせないように注意しながら光を当てる。

「にらめっこしましょ笑うと負けよ、あっぷつぶ」

リサは両側から頬骨の周囲を握り、自分の顔を変形させる。羞恥心

の欠片もない思い切った顔に、新婦は可笑しそうに笑顔を浮かべる。新郎もリサの顔を見て笑いを堪えられず、大口を開けて笑っていた。そして次の瞬間、新郎新婦は自然と見つめあった。その顔には笑顔を浮かべたままだった。

「はい、OKですよ」

シャッターチャンス逃さずにケンショウはカメラに収めたらしく、新郎新婦に声をかけた。

「こういった感じですがよろしいですか？」

カメラのディスプレイに先ほどの写真を何枚かスライドショーのように表示させ、新郎新婦に確認してもらう。そこには見つめあい笑いあう新郎新婦の姿があった。

ディスプレイを見た新郎が満足そうに頷き「これをお願いします」と言った。

「だいぶ表情が解れてきましたね、戻らないうちに撮りましょう」

カメラを構えて元の位置にケンショウが戻り、すかさずカズサが衣装やヘアメイクを直す。

新郎が新婦に寄り添うように近付き、手を握る。新婦は恥ずかしそうにはにかみながらも、嫌がる様子はない。どうやらこのスタジオに打ち解けたようだった。

ケンショウの後ろに引っ込んだリサが愛おしそうに見つめながら新婦に声をかける。

「サヤカさん、今、幸せですか？」

「はい」

嬉しそうにはにかんだ笑顔は、この新婦にとてもよく似合ってた。

こうしてリサの初めての仕事は無事に終わったのだった。

## ジン・トニックとギネス

「はい、OKです」

過去の記憶に意識を飛ばしていたトオルは、ユキコの声で現在に戻ってきた。カメラをユキコから受け取りケーブルを繋いで、手元のパソコンにデータが送られてくるのを確認する。

「データ転送開始です」

それを聞いたユキコはカズコとカズサに声をかける。二人は新郎新婦を控え室に案内するためスタジオを出て行った。

新郎新婦一行をスタジオの外へ見送った後、ユキコはトオルの頭をバスケットボールの様に驚掴みにして聞いた。

「何考えてたの？」

「何でもないツスよ」

「ほんとに？リサのことじゃなくて？」

「な、何でそうなるんですか!？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

やや伸びてきたボブカットの毛先を耳にかけて、あっけらかんとユキコは言い放つ。鎌をかけられたと気づいたトオルは、データを受付のパソコンに転送する作業に逃げる。

「そっぴやあさ、いつから好きなの？リサちゃんのこと」

「そこは前提なんスね」

「違うなら否定しなさいよ」

「…もういいです」

「で、いつから？」

「初めて会った日から気にはなってた」

「てことは、恋を自覚したのは最近だね？青年」

「だあああ、も、ほっといてくださいよ」

「鈍いよ青年、多分店のスタッフ、リサ本人も含めてほとんど気が付いてるよ」

「うそだあ！？だってアカネさんはカズコさんぐらいだろうって…」  
「ほんとう、リサは前の恋愛引きずって見てみぬフリしてたけどね」

墓穴を掘ったことと好きな人にまで自分の感情が筒抜けだという二重のショックに頂垂れるトオルをよそに、スタジオの隅からスツールを引つ張つてくると、ユキコはトオルの向かいに腰を下ろしカメラの片付けを始めた。

時刻はもう二十時を過ぎている。今のが今日最後の仕事だった。

「でも、なんかリサも吹っ切れたみたいだし、トオルの方に気持ち向けてもらういいチャンスなんじゃない？」

「んな簡単に言わないでくださいよ」

「だって他人事だもーん」

悪びれずにいうユキコに、トオルは頭を抱える。この人に口で勝てた例がないのだ。どうやって逃げようか、そのことばかりに気が急いで、肝心なアドバイスを聞き逃しそうになった。

「ちゃんと弱音、受け止めてあげなさいよ」

「え？」

「リサ、ここきたばかりの頃って実は家庭が大変だったのよ、知ってた？」

「なんとなくはアカネさんから」

「大学中退する少し前に同級生に告白したって話は？」

「知らないです」

「じゃ、それは本人からうまく聞き出すことね」

手早くカメラを仕舞い終わると、カメラバッグを担いで立ち上がった。

「とにかく、リサは本音や弱音を他人に見せたがらないんだから、手に入れたいなら寄りかかって倒れないところ見せてきなよ」

「了解ッス」

「先に受付に行ってるから、データ転送終わったらスタジオ閉めちゃってね」

右手をひらひらと振りながらユキコはスタジオを後にした。可愛い後輩たちの明るい未来を祈りながら。

最後の客が無事に写真を選び終えて帰っていったのを見届けてから店を出ると、時刻は二十一時半になっていた。

トオルは昼間にも入ったカフェのドアをくぐる。昼間と打って変わって店内の照明はやや落とされ、むき出しだったテーブルにはクロスが掛けられている。

その上にはキャンドルが置かれ、テーブルに座る客を暖かく照らしている。店のムードから夜はカップルが多く利用するのだ。

一方カウンターは特に照明が落とされていて、隣同士の顔も近づけ

なければ良くは見えない。その一番奥に、目当ての女性が座っていた。

「遅くなって悪い」

「ホントだよね」

「だから悪いって」

両手を合わせて拝むように頭を下げると、「しょうがないな」とリサは笑う。

「トオルと二人で夜に来るの初めてだよね」

「ああ」

「なんか不思議な気分」

二人の間に沈黙が流れる。タイミングを図ったようにウェイターが近付いて、昼間と同じ瑠璃色のタンブラーをテーブルに置く。

薄明かりの中で輝くタンブラーは、少し濃い瑠璃紺をテーブルに落とす。

きらきら揺らめく瑠璃紺の光を何ともなしに見ているリサの横で、トオルはアルコールを注文した。

「で、約束どおり白状しろよ？」

「忘れてなかったか」

「いくら俺でもそこまでバカじゃない」

「ホント、敬語が外れるとムカツクよね、トオルってさ」

「ほれ、逃げないでさっさと話して楽になれよ」

リサがムスツとした顔で片肘をついてそっぽをむけば、トオルは優しい笑顔を浮かべて頭を撫でる。年下に子ども扱いされた、否、トオルに子ども扱いされたのがなんとなく癪に障ったりサはそっぽを

むいたままだ。

すぐに機嫌を直さないと判断したトオルは、リサのショートカットの髪を一房指に絡ませて遊ぶ。どこまでリサが心を開いているのかわかりたかったのだ。

「恥ずかしいから止めてくれる」

片肘に頬を寄せたまま、口をへの字に曲げて目線だけで睨んでくる手を払いのけたり、強く嫌がったりしないことに内心ほくそ笑みながらトオルは手をどかす。

「じゃ、洗いざらいしゃべること」

ニイツつとまるで御伽噺に出てくるチシャ猫のように笑うトオルを見て、リサは逃げられないと悟る。

軽くため息をついた時、ウェイターが二人分のアルコールを運んできた。

「ジン・トニックとギネス、お待たせしました」

底の丸い透明なタンブラーには、それぞれが好きな透明なジン・トニックと黒いギネス。まるで対照的な二つのアルコール。

何者にも染まらないリサと、腹黒いトオル。まるで二人そのものだとトオルは思う。そして、透明な色を自分の色に染めたいと思う支配欲と独占欲。

ヤンチャな頃には自覚もなかった欲望が確かにトオルの中に存在している。それにリサが気づいていないのは、おそらく、思いがこちらに向いていないから。

ならば、こちらの存在を自覚させればいい。トオルはこのチャンスを逃すつもりはなかった。

「こんな話聞いてもつまらないし、テンション下がるよ?。」

「それをいつまでも引きずってるのが悪い、辛いなら半分持つから自分のアルコールを一口含みながら、リサは逡巡していた。元来、全てを自分の中に溜め込むタイプのリサは、辛いことや悩みを他人にしゃべることに慣れていない。それを少しずつ吐き出せるようになったのは、偏に職場環境のおかげだろう。」

「大学の連中と納涼船に乗ったんだ」

「うん」

ポツリと話し出したリサに、トオルは相槌を打つ。

「そこに、大学を辞めるときに告白した相手がいてさ、彼女連れてた」

「うん」

「あたしさ、母さんが倒れて、大学辞めなきゃいけなくなって、働かなくちゃって焦って自分追い詰めて、いっぱいいっぱいだったんだよね」

「うん」

「そんな時、アイツの優しさに縋りたくなって送別会の時、告白した」リサは両手でタンブラーを包み、傾けたり揺らしたりして中のライムを泳がせている。次の言葉を探しているようだ。  
ギネスを半分程に減らして、トオルは次の言葉を待つ。

「結局、辞めるまでに返事はもらえなかった、しかも告白はなかったみたいになってさ、普通にメールが来んの『大丈夫?』『仕事は慣れた?』って」

リサは手に持ったアルコールを、せり上がってきた感情を押し戻すように呷った。普段ならそんな飲み方をしないから、今夜は危ないかなあ。と、心のどこかでリサは思う。

「無かったことにされたんだってすぐにわかった、しばらくして友達にメールくれたんだ、アイツが後輩と付き合いだしたって」

「うん」

「それで決めた、アイツのこと忘れようって、でもダメだった」  
「どうして？」

「心地よかったから、気のおけない仲間で、何でも話せてバカやる友達、それはアイツも同じだったみたい」

かぶりを振ってリサは自嘲するように笑う。俯き加減の横顔は、泣くのを我慢しているのだろう。所在無さ気に瞳が揺れる。

「違うか、アイツは友達のままだったんだ、でも、あたしはアイツがどうしようもなく好きになってた」

堪えきれない感情を押し戻すため、再びアルコールを煽る。今日は本当にピッチが速いとリサは内心で自分に呆れる。こんな弱い姿を、トオルに晒すとは思いもしなかった。

「あこから有耶無耶になってた気持ちに、けじめを付けに行ったんだけど、やっぱり辛いなあ」

「なら寄っ掛かれよ」

スツールにしっかりと座ってギネスを片手に話を聞いていたはずのトオルの音がすぐ傍で聞こえて、リサは右側に振り向いた。キスできそうな程近くに、トオルの顔があった。



## 雨上がりの夜明け

「俺の肩ならいつでも貸すよ?」

間近にある、心配そうに見つめるトオルの黒い瞳の奥に何かがちらつく。その正体を知っている気がする。

視界の隅に映る瑠璃色のタンブラーが、何故か昼間の出来事を思い出させた。あんな恥ずかしいじゃれあいをしたことなどリサにはない。

思い出したとたんトオルの顔を見られなくなり、目を逸らす。顔ごと逸らせたかったが、それをしたら負けだと思ったので顔は近いまままだ。

微妙な変化を感じ取ってトオルは続ける。

「そうやってなんでも一人で溜め込まないでさ、俺ならいつでも寄り掛かっていいから」

「う…うん」

「他にはもうない?」

今まで見たこともない優しい表情に、リサの冷静な部分が唐突にトオルの奥にちらつく何かの正体を掴む。

答えを掴んだとたん酔いも感傷も吹っ飛んで目を丸くするリサ。ようやく気づいたか。とトオルは内心で喜びながら、二人の距離を離す。

離れてしまった距離が少し寂しいと感じたりサは、自分の感情に驚いた。

「で、結局どうなったの?その納涼船で」

「え？あ、えっと、好きだったって言い逃げしてきた」

「なんだそれ」

「うっさいなあ」

恥ずかしさ紛れにポスツと猫パンチを喰らわすリサ。先ほどまでのしおらしさは何処に行ったのか、あつという間にいつもの男勝りな言動が戻っていた。

その顔が少し赤いのは、どうやらアルコールが入っているだけが理由ではないようだ。

「リサってメンタルの振り幅激しいだろ？」

「なに突然」

「いや、怒ったり沈んだり恥ずかしがったり忙しそうだと思って、まあどれも可愛いからいいけど」

可愛いという言葉を言われ慣れていないのを、昼間の反応で知ったトオルはわざと強調して言う。いよいよ暗がりでもわかるくらいにリサは顔を赤くする。

その様子を見ながら、トオルはポケットに手を突っ込み目当てのものを取り出した。

「悪かったね」

答えになっていない悪態をつくと正面を向いてジン・トニックを飲もうとするが既に空だった。そのままむうと口を一文字に閉じて恥ずかしさをごまかす。

いろんな感情がない混ぜになって、もはやキャパシティを超えていた。

ウェイターを呼んで今度はジン・バックを注文する。

「リサ」

トオルが優しい声音で名前を呼ぶと、「なに？」とやや棘のある声音で答えながらトオルのほうを向いた。

「これ」

差し出された手は握られていて、何を持っているのかわからない。リサは怪訝そうにトオルを見る。

するとトオルはリサの右手を取り、強引に自分が持っているものを渡す。

受け取らされた物はとても小さいらしく、ほとんど感触がない。右手を開くと、そこにはブルー・ジルコンのピアスの片方が乗っかっていた。

「それ、俺のつてシルシだから」

「はあ？」

「俺、リサが好きだからさ」

「だからってなんでピアス寄こすの」

「だから愛の告白？」

「意味わかんない!!」

トオルってこんな奴だっけ？と思いながら、内心は半分パニックになりかけていた。年下のくせに自分の感情にずかずかと遠慮なく入ってくるトオルに、否、そんなトオルにどんどん向いていく自分の感情に。

頭を抱えるリサの横でトオルはジン・バックを運んできたウェイターにポーターガフを注文する。

「で、つけるの？つけないの？」

「いきなり追い詰めんなよお」

アルコールが入って緩やかになった思考回路は、この状況について考えることを放棄しようとしていた。その一方で、ここで答えを出さなければ、トオルの望む形で答えることはできないだろうと考える。

今までにないパターンの告白のされ方は、リサにはハードルが高すぎるのだ。

頭を抱えたまま頂垂れるリサの頭を、トオルは優しく撫でた。

「焦らせて悪かった、でも、考えとけよ？」

「…わかった」

右手に持ったままのピアスを見つめる。ポーターガフを運んだウェイターが気を利かせて、氷の溶けきった瑠璃色のタンブラーを下げ新しいタンブラーを置く。

水がゆれるのと一緒に揺れる瑠璃紺色の光を見て、心を決めた。

その後、たわいない世間話やカメラについて盛り上がっているうちにいつの間にか閉店時間になってしまった。

ウェイターが申し訳なさそうに「お会計をお願いします」と皮製のカルトンに会計伝票を乗せて来た。

バッグから財布を出そうとしたりサを、トオルがやんわりと止める。

「今日は俺のおごりって約束」

「でも、結構飲んじゃったし、払うよ」

「いって、その間に帰り支度しとけよ」

そのままレジまで歩いていったタオルを見て、ここでなお食い下が  
るのは失礼だろうと思いつき追いかけるのをやめた。

そしてホール片付けを始めたウェイターに声をかけてレストル  
ムへと向かった。

しばらくしてレストルームから戻ると、すでにタオルは帰り支度が  
済んだ状態でスツールに寄り掛かっていた。

「ごめん、待たせた」

「いや、大丈夫」

「行こう」

バッグを掴み、店内を出口へと歩く。すれ違うウェイターに「ごち  
そうさまでした」と声をかけながら歩くりサの右耳を見て、タオル  
は息を呑んだ。

「マスターいつも遅くまでごめんね」

「いや、お宅にはお世話になってるから大丈夫だよ」

「またお店の人たちと来るね、ごちそうさまでした」

マスターに挨拶をして外へと出たりサ。外に出たとたん、後ろから  
抱きすくめられる。

背中に温もりを感じたとたん、恥ずかしくなって俯く。

「決断早いな」

「こんなことお酒の力と雰囲気勢いがないと絶対できない」

「つけたらには逃がさないから、覚悟しとけよ」

「わかったから離れる!!!ここは往來だ!!!」

我慢できなくなったリサはお腹に回されたトオルの腕を引つ掴みはがそうと暴れた。クスクスと笑いながら、それに応じたトオルは腕を外した。

おかしそうに笑顔を浮かべて歩くトオルと、むくれたままその横を歩くりサ。なんだかやりきれない不満を抱えながらも、リサは言った。

「ありがとう、トオル」

「どういたしまして」

トオルの左耳にブルー・ジルコンの石が輝いているのを見て、リサは嬉しくなった。

新しい恋の始まりは、雨上がりの青い夜明けのようだった。

雨上がりの夜明け (後書き)

これにてリサ救済計画終了です。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

次回からは、別の人物にスポットをあてた話が始まります。

基本同じお店が舞台ですので、引き続き彼女らも登場いたしますので、今後ともごひいきの程よろしくお願いいたします。

20110519 柳すすたけ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2370t/>

---

sun-dawn blue

2011年5月22日23時27分発行